



している。

全府県の資料が整備された昭和33年の努力量を100としたときの49年の指数は、北区の小型底びきでは286、沖合底びきでは87、西区の小型底びきでは279、沖合底びきでは235となり、小型底びきと沖合底びきを合わせると、北区では151、西区では247となっている。

### 3. 総漁獲量

1 そうびき沖合底びきと小型底びき縦びき1種による日本海区の総漁獲量は、大型船の一部が沖合スルメイカ漁業に従事するようになった44年以降を除くと、40年の約8.0万トン、36年の約6.6万トンの記録があるが、多くは7.0~7.5万トンを示し大きな変動はない。41年以前は北区と西区との比がほぼ1:2であったが、その後は西区の減少と北区の増加により、その差が縮まってきている。

詳細にみると、北区の沖合底びきでは28年に1.9万トンを示したが、その後減少し、35年以降は1.1~1.3万トンの横這い状態にある。小型底びきは28~33年に0.7万トン台であったが、その後増加して、49年には1.9万トンに達した。西区の沖合底びきでは、43年以前は3.1~4.1万トンを上下していたが、その後は2.2~2.6万トン台に低迷している。小型底びきは28~31年に0.9~1.0万トンを示したが、その後増加し、36年以降は1.3~1.4万トン台で安定している。

西区沖合底びきの近年の漁獲量低下はスルメイカ兼業船が、特に多くなっているためであるが、一般に漁獲努力量が年々増大しているにもかかわらず、総漁獲量がほとんど増加していないことに注目しなければならない。

### 4. 魚種組成の変動

過去20年以上にわたって総漁獲量に大きな変動がないにもかかわらず、魚種組成には大きな変化がみられ、水域によって若干の相違はあるが、組成の変化はそのままそれぞれの種の資源状態の変動をよく反映している。

1) 漸増型: ハタハタ…年々組成比が高くなってきたもの。

2) 減少→増大型: スケトウダラ、アブラツノザメ、ホッケ、アカガレイ…30年頃には高い比率を示したが、その後低下し、近年また増大しつつあるもの。

3) 不規則型: スワイガニ、ホッコクアカエビ、ニギス、ヒレグロ…種独自の変動のほかに、操業実態の変化にも大きく支配されて不規則な変化を示すもの。

### 5. 魚種別資源の動態

1) 魚種別漁獲量、標準化努力当り漁獲量による分析(省略)

2) 昭和45年度以降の機械集計による主要魚種別大海区別資源量指数の変動…努力量単位: ひき網回数(省略)

### 6. 操業努力量の標準化方式の修正

従来は努力量の標準化のために北区と西区ごとに算式を設けていたが、種の分布様式と操業形体を考慮して今後は次のように変更することが望ましいと考えている。

1) 北区ブロック沖合底びき(青森~新潟)

$$C = 0.0107 \text{ HP} - 0.513$$

2) 北区ブロック沖合底びき(秋田~富山)

$$C = 0.0089 \text{ HP} - 0.109$$

3) 中ブロック沖合底びき(富山~京都)

$$C = 0.0019 \text{ HP} + 0.400$$

4) 中ブロック小型底びき(石川~兵庫)

$$C = 0.0045 \text{ HP} + 0.092$$

5) 西ブロック沖合底びき(兵庫~島根)

$$C = 0.0057 \text{ HP} - 0.171$$

6) 西ブロック小型底びき(島根・山口)

$$C = 0.0070 \text{ HP} + 0.097$$

C: 漁獲量(単位トン)

HP: 馬力数

7. 底びき網漁場およびこれをとりまく情勢の変化

1) 山形県以北においても水深300~400mの深海域の開発が徐々に進行しつつある。

2) ホッコクアカエビを対象とする水深500~600mの深海域操業が定常化しつつある。

3) 韓国東岸底びき漁場の利用度は極度に低下した。

4) 44年頃から主として40トン以上の大型船のなかに、7~10月を中心に沖合スルメイカ漁業に従事するものが増加し、底びき漁業による収益を上廻る例もしばしばみられる。

5) スルメイカ兼業を背景として船型の大型化が急速に進んでいる。特に兵庫、鳥取、島根各県船の大型化は顕著である。

6) 底びき網漁業にとって最重要資源であったズワイガニは全域的に資源状態が極端に悪化している。

### II ベニズワイ籠漁業

富山湾では、すでに昭和29年頃からベニズワイの漁獲記録がみられているが、多くの府県による籠漁業が盛んに行なわれるようになったのは44~45年以降である。

現在の許可統数は281統で49年の漁獲量は約2.7万トンに達している。

(生態については省略)